

親鸞仏教センター通信

2012.
June

2012年6月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

第41号

危機の時代と親鸞

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之

現代世界の危機的状況は、さまざまな様相を呈しながら、いよいよ行き詰まりが近いことの危機感を増している。危機として指摘されるのは、人類を取り巻く環境的な変化が一番目立つところであろうか。たとえば、地球の大気圏を覆い宇宙からの放射線を遮るはたらきをしているオゾン層が破壊されているとか、地球全体の気温上昇が続いて氷河の融解によって陸地が浸食されつつあるとか、地下資源の大量掘削で近い将来、資源が枯渇することが予測されるとか、さらには人口増加に食糧増産がついて行けず、食料不足の警鐘が鳴らされているなど、このままでは人類の生存を脅かすような事態が避けられないところまで来ているということが叫ばれているのである。

こういう危機の状態が、平安から鎌倉にかけての、親鸞聖人の生きた時代の危機的状態に酷似しているのではないか、ということが最近指摘されている。だからして、現代の危機の事態に対して、親鸞聖人の思想が何らかの方向を示唆しうるのではないか、と言われる。たしかに、鎌倉幕府の成立(1192年)は、親鸞聖人の二十歳前後のことであり、政治体制の変革のみならず、天変地異・疫病・飢饉等が繰り返して襲う時代と重なるのが聖人の生涯であつたらしい。

決定的な相違点は、人間の知性によって科学文明が発達し、貨幣経済が高度資本主義による金融経済になって、その行き詰まりが迫っていることであろうか。このことを推し進めている人間の内面契機を探るなら、欲望の増長が顕著であろう。そのふくれあがる貪欲が人間の外形的部分を改変して、その結果が人間を取り巻く自然環境や人間関係をも危機的状況に追い込んでいるのではないか。

しかし時代を超え、事態の相違点の大きさをも超えて共通していると言えるものがある。それは人間という存在が、愚かな凡夫であるということである。そして、限られた生命力・能力・身体を与えられて、取り替え不可能な一生を生きるものであるということである。この一回限りの生存を、有限の生命として生きるほかないのである。

それにもかかわらず、この愚かな存在に、無限からの付与を受けていると感受できるかどうか。大悲の恵みをたまわって共にこの悲しき罪惡深重の身を生きるという、存在の深みの課題を見いだせるかどうか。これが困難な時代を生きた聖人からの大切な呼びかけなのではなかろうか。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」②

凡夫称名と果遂の誓い

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第49回、50回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第49回では「第二十一願」「第二十二願」について、第50回では、「第二十二願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第47回から一部を紹介する。

(囑託研究員 越部良一)

■ 凡夫称名

第十七願は、「諸仏称名の願」といわれて、諸仏によって名が称えられるということがある。第二十願は、「設我得佛、十方衆生」（『真宗聖典』18頁、東本願寺出版部。〈以下、『聖典』と略称〉）とあって、衆生に我が名を称えてほしいという呼びかけになっている。衆生が称えるということは、与えられたものを行として凡夫という身で称える。それに対して、諸仏が称名するということは、阿弥陀如来の本願、願いに賛同しますよというかたちです。称えたから仏がもっと偉い仏に成るということはないのです。仏と仏とは平等である。あの仏より俺が偉いなど比較する煩惱がない。一人ひとりが一人ひとりの仏のあり方、仏地に住して、そして悠々と仏であることを喜んでおられる。そういう世界が開けている。凡夫の世界はそうではない。我欲と利権の世界ですから、あいつよりは上にいってやろうとか、逆にあいつより下に置かれたからといって怨むとか、そういう比較対対の

世界です。そうすると、同じ念仏を行ずるということの内容が随分と違う意味をもっているということがあるのではないか。

第十七願、「諸仏称名の願」こそが純粹なる大行だと。これにおいて名号は大行であり、大行が行ぜられてあるところに、絶対満足の一如の功德宝海が開かれる。しかし、なかなか「南無阿弥陀仏」を聞いて称えるところに絶対満足があるなどと人間はわかりませんから、凡夫の考えでは今生きているところは不平不満だらけの、ろくな世界ではない。不平不満がない世界が欲しいと考えて、そのために何か行為をしたり努力をしたりして生きている。それに役に立つ行をくださるなら、それを一生懸命にやりましょう。こういう関心です。だから、凡夫称名、凡夫が称名するということになると、大行の事実にならない。

■ 定散自力の称名

自分を支えているもの、自分を動かしているもの、そういうものは、みんな何か自分の根源から、違うものがはたらいていると気づくときに、自力から他力への転換が起こるのでしょうが、起こったときに飛びついたのが念仏でも、その念仏をまた自力で行ずる。だから、こういうご和讃がある。「定散自力の称名は果遂のちかいに帰してこそ おしえざれども自然に真如の門に転入する」（『聖典』484頁）と。念仏に帰するのだけれど、「定散自力の称名」とおっしゃる。人間の側の心として、「定」、精神統一の心か、「散」、行動する心かというので、定・散の機ということをおっしゃるわけです。自分

に縁のあったあらゆる行をやってみたけれどもだめだった。それでは、念仏ひとつを如来が誓っているのだから、それでいこうと。こうなるのだけれど、心根に定散が残っている。もともともっていた、自分が修行をしてどうにかなろうと思う、そういう自力心が「南無阿弥陀仏」を取り込もうとする。それをここで定散自力の称名というわけです。

われわれが自分の我執のままに念仏すれば、念仏する動機といい目的といい、全部、定散自力だといってもよいのです。念仏したことによってちょっとは心が落ち着いたとか、称えていたら何かよいことがあったとかしかわかりませんから。それでどのようなことになるかというと、親鸞は「同行・善知識に親近せざる」（『聖典』356頁）ということを書いています。つまり、叱咤激励してくれるような友人やら師匠が見えなくなって、この世でこの程度ならよいと自己満足をして歩みが止まる。これは、人間が本当に歩むということが仏法であるなら、その仏法を忘れるということです。それはまさに三宝見聞の利益を失うという、化身土の宮殿の中のかたちとして親鸞が『大経』から引文するのとぴったり合うわけです。阿弥陀の世界に生まれたと思った途端に三宝、仏・法・僧がいなくなる。

■ 果遂の誓い

第二十願は「果遂せずんば、正覚を取らじ」（『聖典』18頁）と結ばれている。第二十願を果遂するとは、第二十願の救いを成就するという意味もあるのでしょうけれども、第二十願の救いに止まってはならないという果たし遂げ方がついているとも見られるわけです。つまり、如来の大悲が衆生の気づきを勧めるために、「果たし遂げずんばやまん」という誓いをもってわれわれにはたらきかけている。たすからなかったのは、自分の根に本当に本願力を信じようとしないという問題があったのだと。名号を信じないわけではない。名号を信ずるのだけれど、それを使って何かよいことがくると称え

る。それは凡夫の行です。でもわれわれ凡夫は凡夫の行を出ることができないのです。凡夫としてこの世を生きていれば自力の執心は抜きがたい。この問題を親鸞聖人は第二十願の問題として徹底的に考えられた。

どうしたらこれを抜けられるか。人間からは抜けられない。自分で出ることのできない闇がある。そのときに、果遂の誓い、本願力は、その闇をも破らずんばやまんとはたらき続けているのだと。一如宝海に帰るまで、どうか歩んで欲しいと願っている。それに気づけば、ひとりでに真如の門に入る。われわれから入っていけないものではないけれど、向こうから来てくださる門がある。「果遂の誓いに帰してこそ おしえざれども自然に 真如の門に転入す」と。こういう何か謎のような言い方で、第二十願のはたらきというものの大きさを教えてくださっているのではなからうかと思うのです。

ですから第二十願というものにおいて、われわれに気づかせる闇の部分と明るみの部分と、両面があるように感じられます。歩ませる批判原理として第二十願というものを親鸞聖人は見いだされた。第二十願に止まってはならない。第二十願を超えて、本願力を本当に信受する第十八願に帰してほしい。そういうのはたらきが果遂のはたらきにある。こういうことかなと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、公開（無料）で開催しています。

記

日時：2012年6月13日(火)午後6時30分～9時
7月 4日(火)午後6時30分～9時
8月 6日(月)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

現代と親鸞の研究会・第40回

いかにして科学技術を生の言葉の 営みのなかに取り戻せるか

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授 平川 秀 幸



平川秀幸 氏

2012年3月12日、東京国際フォーラム（千代田区）において、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授である平川秀幸氏をお迎えして「現代と親鸞の研究会」を開催した。科学的知識をいかに共有し、科学をいかに共に創り上げるかという科学技術コミュニケーションの問題に取り組んでおられる平川氏に「いかにして科学技術を生の言葉の営みのなかに取り戻せるか」をテーマに語っていただいた。ここに、その一部を紹介する。

（嘱託研究員 大谷一郎）

■ 欠如モデル

私の専門の科学技術社会論という分野では、科学技術と社会、あるいは市民、人々との関係を「欠如モデル」という言葉で表すことがよくあります。

これは、ある科学技術を巡って何か紛争が起きる、例えば遺伝子組み換え作物についてさまざまな不安が生じ、各地で反対運動が起こる。また、今現在、国内で最も議論が盛んなことですが、東日本大震災以降、放射能に対するさまざまな不安が広がり、被災地の瓦礫を各自治体で受け入れることに対して、各地で反対の声が上がる。これらの紛争の原因を、それは基本的に人々が無知だからである、科学について、遺伝子組み換えについて、放射能について、原子力について無知だから不安になり、反対するのだという見方です。つまり、人々の知識が欠如しているから問題が起きるという見方です。

したがって、その反対に正しい知識をわかってもらえれば、不安や反対は自ずからなくなるのだと。専門家からは「ご理解ください」とか、

あるいは「素人はすぐに感情的に反対をする」という言葉をよく耳にします。最近のことで言えば、3.11以降、放射能について正しい知識を身につけて「正しく恐れよう」という言葉もたびたび耳にします。こうした言葉は、基本的には「欠如モデル」の見方・考え方を反映した言葉だと考えることができます。科学技術と社会、人々との関わり方をどのように考えるか、また実際にそれをどのようにして扱うかということを経営してきてきたのは、そのような見方でした。

そうした欠如モデルについて、もう少し突っ込んで見ていくと、そこには「科学」対「感情」という、ある種の二分法が考え方のもとにあることが見えてきますが、科学技術をめぐる論争は、そのような単純なものではありません。

■ 欠如モデルから対話（熟議）へ

イギリスに首席科学顧問といって、政府、特に首相に対して直接科学的、技術的な問題について進言・助言するアドバイザーがいます。その職にいた Sir Robert May という科学者が残した言葉を紹介します。これは、遺伝子組み換え作物に関する論争に対してですが、このように言っています。

「この論争は安全性に関するものではなく、どのような世界に生きたいと欲するかというはるかに大きな問題に関するものである。」

つまり、論争で問われているのは、「どのような世界に生きたいか」という、われわれ一人ひとりが誰でも自分の言葉で語れる、考えることができる問題なのだということを述べたわけですが。そこには欠如モデルの「ご理解ください」という科学者や政府から一方的に発せられる言葉から、市民の疑問や問題提起、意見から科学

者や政府が学ぶこともあるような「対話」への転換が特徴づけられています。この転換の必要性を訴えた議会上院の報告書でも、この May 卿の言葉は引用されています。これらのことにより、社会との対話ということがこの後、イギリスでとても重視されていきます。

その社会との対話について、最近、日本でも「熟議」という言葉が聞かれるようになりました。これはもともと政治学の言葉で、英語では deliberation です。わかりやすく言うと熟慮しながら議論し、議論を通じてさらに熟慮することです。それを略して熟議と呼んでいます。これから、日本でもだんだん重視されていくと思うのですが、イギリスでは十数年前にそうした営みが科学技術の分野でも非常に重視されるようになりました。

また、日本語でも「世論」と「輿論」という言葉を使い分ける場合があります。世論というのは英語で言うと public sentiment、つまり、どちらかというと、感情的な問題です。街頭でのアンケートのようにあまり深く熟慮したり、いろいろな知識や情報と照らし合わせて考えるということをしない場合と考えます。そうしたものは少し深く考えると、答えが変わってしまうことがたびたびあります。人々の意見を、熟議を経る前と後で分ける意味で「世論」と「輿論」と分けて使うことがあるのです。その意味で、世論というものを輿論に変えていく、輿論というものを社会のなかで育てていく役割が対話、熟議にはあるのです。

これを別の角度から、特に個人の視点から見れば、他者と出会う場としての熟議ということが言えます。さらに、それは他者と出会うことによって、自分も新しく開かれていく機会でもあります。自分はこういう感じ方、考え方をするのだという自分の知らない自分を発見するわけです。広い意味での他者との出会いでもあるという意味づけができると思います。

■ 宗教者への期待

本来、日本の歴史のなかで仏教は非常に公共的な役割を果たしてきたものだと思います。そして、お寺というのは近所の人たちや檀家さんが集まって日常的に議論をしたり、場合によってはそこで知恵を絞って、村の問題を話し合っ

たりする場として使われてきたと思います。しかし今、対話の場が不足しています。

3.11以降、人々は津波や放射能の汚染によってさまざまなものを失い、特に津波で肉親や親しい人を失ったたくさんの人たちがいます。そこには失ったがゆえに見えてくるもの、渴望するものがありありと開けて、場合によっては言葉にならない闇として開けていると思います。そうしたものに光明を与える、言葉を与えるというのは、やはり信仰の言葉であると思います。

仏教であれば、仏教を信仰されている人たちのなかで、信仰の言葉というものは、脈々と生きてきた言葉だったと思います。それをもう少し広く公共の言葉として、宗教の言葉、信仰の言葉が本来の力を取り戻す機会がもししたら今、訪れているのではないかと考えております。

(文責：親鸞仏教センター)

※平川秀幸氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第26号(2013年6月1日号)に掲載予定です。

平川 秀幸(ひらかわ ひでゆき) 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授

1964年東京生まれ。1989年国際基督教大学教養学部理学科物理専修、1991年東京工業大学理工学研究科応用物理学(非平衡統計物理)修士課程修了。2000年国際基督教大学大学院比較文化研究科博士後期課程(博士候補資格取得・退学)。国際基督教大学教養学部人文科学科非常勤助手、財団法人政策科学研究所客員研究員、京都女子大学現代社会学部講師、神戸大学大学院総合人間科学研究科非常勤講師、京都女子大学現代社会学部助教授、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター客員助教授、立命館大学大学院先端総合学術研究科非常勤講師、2006年大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授。

著書に、『科学は誰のものか—社会の側から問い直す』(日本放送出版協会)、共著に『もうダメされないための「科学」講義』(光文社)、翻訳に『科学論の実—in パンドラの希望』(産業図書)など多数。



「現代と親鸞の研究会」(於:「東京国際フォーラム」)

て、まことなるころなきみなりとしるべしとなり。「斟酌すべし」(唯信鈔)というは、ことのありさまにしたがうて、はからうべしということばなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五五六～五五八頁)

試訳をめぐる

『原文』一心かくるというは、信心のかくるなり。信心かくというは、本願真実の三信のかくるなり。『観経』の三心をえてのちに、『大経』の三信心をうるを、一心をうるとはもうすなり。このゆえに、『大経』の三信心をえざるをば、一心かくるともうすなり。

『現代語訳』一心が欠けているというのは、信心が欠けているということである。信心が欠けるというのは、本願に誓われた真実の三信(三信心)が欠けているということである。『観無量寿経』に説かれている三心、すなわち至誠心・深信心・回向発願心を翻して、至心・信心・欲生という、『大無量寿経』に説かれる三信心をうることを、一心をうるということである。このようになわけて、『大無量寿経』の三信心をえていないことを、一心が欠けているということである。

けで、事実、このころの内は、虚しく、偽り、飾り、諂うところだけが常にあつて、真の心がない身であると知りなさいというのである。「斟酌すべし」(『唯信鈔』)というのは、わが身の現実に照らして、よくよく考えなさいという言葉である。

一心が欠けているとは、信心が欠けているということ。それは、本願に誓われた真実の三信心が欠けているということである。一心をうることは、真の報土に生まれるための絶対条件である。

では、一心をうるとはどういうことだろうか？ その内実を親鸞は、『観経』の三心をえてのちに、『大経』の三信心をうる」と教えている。しかし、それは段階的ということではない。『観経』の三心について詠まれた和讃を見てみよう。

定散諸機格別の

自力の三心ひるがえし

如来利他の信心に

通入せんとねがうべし

(『真宗聖典』四八六頁)
『観経』の三心とは自力の三心である、というのが親鸞の理解である。一方、『大経』の三信心は、利他の三心である。

「えてのちに……」とは、はじめはそういう執着、自力のころだったけれども、それが翻されて如来利他の信心を得るという意味である。自力のころから真実の信心への転回が語られているのである。

(訳・親鸞仏教センター)

『anjali』第23号および

『現代と親鸞』第24号を刊行

このたび、『anjali』第23号(写真上)、並びに『現代と親鸞』第24号(写真下)を刊行しました。『anjali』第23号では、弁護士で元裁判官の木谷明氏、信州大学名誉教授で俳人の宮坂静生氏、シノダス代表取締役の芹沢一也氏、哲学者で埼玉大学名誉教授の伊藤勝彦氏、環境エネルギー政策研究所所長の飯田哲也氏、信州大学繊維学部助教授の森山徹氏、大阪大学社会経済研究所教授の大竹文雄氏、浄土真宗本願寺派総合研究所副所長の丘山新氏、東京大学大学院人文社会科学系研究科准教授の藤原聖子氏など、十名の専門分野の方々に、現代社会の課題や最先端での苦闘について、ご執筆いただいています。

一方の『現代と親鸞』第24号では研究論文のほか、「現代と親鸞の研究会」から上智大学クリフケア研究所所長の高木慶子氏の問題提起と質疑。『第5回親鸞仏教センター研究交流サロン』から京都大学大学院教育学部教授の西平直氏の発題と大正大学人間学部教育人間学教授の弓山達也氏のコメント。さらに、「親鸞思想の解明」から本多所長の問題提起(四講座分)を掲載しています。また、今号は鈴木大拙『英訳教行信証』改訂版の刊行を記念し、その特集を掲載いたしました。内容は研究論文のほか、東京大学名誉教授で今回の『英訳教行信証』の監修者である前田専學氏の大谷大学での講演録。鈴木大拙館名誉館長で元大拙師秘書の岡村美穂子氏へのインタビュー内容。「英訳『教行信証』研究会」から大谷大学非常勤講師のマイケル・コンウェイ氏の講義と質疑。ロンドン仏教会理事の佐藤平氏、大谷大学特任教授の安富信哉氏、元当センター研究員の羽塚高昭氏に論文をお寄せいただきました。

anjali



現代と親鸞

第24号

目次	1
現代と親鸞	2
研究論文	3
研究交流サロン	4
研究報告	5
研究紀要	6
研究通信	7
研究情報	8
研究資料	9
研究図書	10
研究雑誌	11
研究新聞	12
研究雑誌	13
研究新聞	14
研究雑誌	15
研究新聞	16
研究雑誌	17
研究新聞	18
研究雑誌	19
研究新聞	20
研究雑誌	21
研究新聞	22
研究雑誌	23
研究新聞	24
研究雑誌	25
研究新聞	26
研究雑誌	27
研究新聞	28
研究雑誌	29
研究新聞	30
研究雑誌	31
研究新聞	32
研究雑誌	33
研究新聞	34
研究雑誌	35
研究新聞	36
研究雑誌	37
研究新聞	38
研究雑誌	39
研究新聞	40
研究雑誌	41
研究新聞	42
研究雑誌	43
研究新聞	44
研究雑誌	45
研究新聞	46
研究雑誌	47
研究新聞	48
研究雑誌	49
研究新聞	50
研究雑誌	51
研究新聞	52
研究雑誌	53
研究新聞	54
研究雑誌	55
研究新聞	56
研究雑誌	57
研究新聞	58
研究雑誌	59
研究新聞	60
研究雑誌	61
研究新聞	62
研究雑誌	63
研究新聞	64
研究雑誌	65
研究新聞	66
研究雑誌	67
研究新聞	68
研究雑誌	69
研究新聞	70
研究雑誌	71
研究新聞	72
研究雑誌	73
研究新聞	74
研究雑誌	75
研究新聞	76
研究雑誌	77
研究新聞	78
研究雑誌	79
研究新聞	80
研究雑誌	81
研究新聞	82
研究雑誌	83
研究新聞	84
研究雑誌	85
研究新聞	86
研究雑誌	87
研究新聞	88
研究雑誌	89
研究新聞	90
研究雑誌	91
研究新聞	92
研究雑誌	93
研究新聞	94
研究雑誌	95
研究新聞	96
研究雑誌	97
研究新聞	98
研究雑誌	99
研究新聞	100

をへ、あるいは億千万衆の中に、ときにまれに一人、真の報土にはすすむとみえたり。三信をえんことを、よくよくころえねがうべきなり。

「不得外現 賢善精進之相」(散善義)

義」というは、あらわに、かしこきすがた、善人のかたちを、あらわすことなかれ、精進なるすがたをしめすことなかれとなり。そのゆえは、内懷虚仮なればなり。内は、うちという。ころのうちに煩悩を具せるゆえに、虚なり、仮なり。虚は、むなしくして実ならぬなり。仮は、かりにして、真ならぬなり。このころは、かみにあらわせり。この信心は、まことの浄土のたねとなり、みとなるべしと、いつわらず、へつらわず、実報土のたねとなる信心なり。しかればわれらは善人にもあらず、賢人にもあらず。賢人というは、かしこくよきひとなり。精進なるころもなし。懈怠のころのみにして、うちは、むなしく、いつわり、かぎり、へつらうころのみ、つねにし

「不得外現 賢善精進之相」(『観経疏』散善義) というのは、外面に、賢

い振る舞い、善人の素振りをしてはならない、いかにも仏道に努め励んでいるような姿を示してはならないというのである。何故ならば、「内懷虚仮」

(内面には虚仮をいだいている)だからである。内は、うちということである。ころのうちに煩悩をもっているのだから、虚であり、仮なのである。

虚は、むなしく、実ではないということとである。仮は、かりであり、真ではないということとである。この意味は、この書の冒頭に述べたとおりである。

(冒頭で述べた) 真実信心は、真の浄土の種となり、実となる。偽ったり、諂

つたりすることなく、真実の報土の種となる信心なのである。こういうわけで、私たちは善人でも、賢人でもないのである。賢人というのは、立派で善い人のことである。私たちには、努め励むころもない。怠けごろだ

親鸞仏教センターの動き

(2012・2・4) 抄出

- 2012年
- 人事発令 (マーク・L・プラム客員研究員が再任)
 - 第9回「尊号真像銘文」研究会
 - 第49回「通算第10回」連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
 - 第15回清沢満之研究会
 - 第7回研究員と読む公開輪読会「信の伝承―和讃に見る聖徳太子―」(〇2月・8②・15③)
 - 親鸞聖人ご命日のつどい
 - 第6回親鸞仏教センター研究交流サロン「関係性を問う直す―少年犯罪をめぐる視点から―」筑波大学大学院人文社会科学部研究科教授・土井隆義氏、大谷大学文学部教授・佐賀枝夏文氏(千代田区・東京国際フォーラム)
 - 第21回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会
 - 第13回英訳「教行信証」研究会
 - 機関紙「親鸞仏教センター通信」第40号を発行
 - 第22回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会「末法の時代における真理とは」大阪大学名誉教授・大塚順氏(千代田区・東京国際フォーラム)
 - 第10回「尊号真像銘文」研究会
 - 第50回「通算第10回」連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
 - 第40回現代と親鸞の研究会「いかにして科学技術を生かすのか」(千代田区・東京国際フォーラム)
 - 第33回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会
 - 第16回清沢満之研究会
 - 人事発令 (田村晃徳、大谷一郎、常塚聡が嘱託研究員として再任)
 - 第41回現代と親鸞の研究会「黙然する『神』」(千代田区・東京国際フォーラム)
 - 第11回「尊号真像銘文」研究会
 - 第9回「親鸞仏教センターのつどい」記念講演「来るべき死と滅亡のために」作家・辺見庸氏「宗教的な死の意味と平等の救い」親鸞仏教センター所長・本多弘之(千代田区・学芸会館「本館」)
 - 第17回清沢満之研究会
 - 親鸞聖人ご命日のつどい
 - 第23回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会
 - 第19回英訳「教行信証」研究会

という、すくなしという。一心かけぬればうまれずというなり。一心かくるといふは、信心のかくるなり。信心かくといふは、本願真実の三信のかくるなり。『観經』の三心をえてのちに、『大經』の三信心をうるを、一心をうるとはもうすなり。このゆえに『大經』の三信心をえざるをば、一心かくるともうすなり。この一心かけぬれば、真の報土にうまれずというなり。『観經』の三心は、定散二機の心なり。定散二善を回して、『大經』の三信をえんとねがう方便の深心と至誠心とするべし。真実の三信心をえざれば「即不得生」というなり。「即」は、すなわちという。「不得生」というは、うまるとをえずというなり。三信かけぬるゆえに、すなわち報土にうまれずとなり。雑行雑修して定機散機の人、他力の信心かけたるゆえに、多生曠劫をへて、他力の一心をえてのちにうまるときゆえに、すなわちうまれずというなり。もし胎生辺地にうまれても、五百歳

ているということである。『観無量寿經』に説かれている三心、すなわち至誠心・深心・回向發願心を翻して、至心・信樂・欲生という、『大無量寿經』に説かれる三信心をうることを、一心をうるというのである。このようなわけで、『大無量寿經』の三信心をえていないことを、一心が欠けているというのである。この一心を欠いてしまつては、真の報土には生まれまいというのである。『観無量寿經』に説かれている三心とは、定善（心静かに精神を集中して浄土を觀察すること）と散善（さまざまな行為としての善行をつとめること）を行う人の心である。この定・散二善を回らし向けて、ついには『大無量寿經』の三信を得ようと願わねるために手だてとして示された、深心と至誠心であると知らなければならぬ。真実の三信心を得ていないから「即不得生」というのである。「即」は、すなわちということ。「不得生」は、生まれることができないということである。三信が欠けてしまつてゐるがゆえに、真実の報土には（即座には）生まれまいということである。自力のところが雑ざつた行をさまざまに修めて浄土に往生しようとする、定善・散善のひとは、他力の信心がないのだから、生死の迷いから抜け出すことができないままに、はるかに永い時を流転しなければならぬ。他力の一心を得て、初めて生まれることができるのだから、「即座には生まれまい」というのである。もし、方便化土である胎生辺地に生まれたとしても、五百年もの時を経て、あるいは億千万の人々のなかで、ごくまれに一人くらいしか真実の報土にはすすめないようである。真実の三信心をえるということ

を、よくよく心得て、ねがうべきである。

『聖典』の試訳（現代語化）

「あらわに、かしこぎすがた、善人のかたちを、あらわすことなかれ、精進なるすがたをしめすことなかれとなり。」と親鸞は言う。なぜならば、「内懷虚仮」だからである、と。

そもそも、その元となった「不得外現賢善精進之相内懷虚仮」とは、中国の善導大師（六一三―六八二）の言葉である。この文を親鸞は、独自に読み替えた。すなわち、「外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懷くことを得ざれ」という、仏の浄土に行きたいのなら内外の二面性・裏表があつてはならないと読むべき文を、親鸞は人間のありのままの姿を凝視して、わが身の事実に立つて読み替え、冒頭のように了解されたのである。

「しかればわれらは善人にもあらず、賢人にもあらず。……懈怠のこころのみにして、……まことなるこころなきみなりとするべしとなり。」

（囑託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳 ⑰

原文

「具三心者 必生彼国」（観経）とい
うは、三心を具すれば、かならずかのく
ににうまるとなり。しかれば善導は、「具
此三心 必得往生也 若少一心 即
不得生」（往生礼讃）とのたまえり。「具
此三心」というは、みつの心を具すべし
となり。「必得往生」というは、「必
は、かならずという。「得」は、うるとい
う。うるというは、往生をうるとなり。
「若少一心」というは、「若」は、もし
という、ごとしという。「少」は、かくる

現代語訳

「具三心者 必生彼国」（『観無量寿経』）というのは、三心を具えるな
らば必ず、阿弥陀の浄土に生まれるということである。そうであるから、
善導大師は「具此三心 必得往生也 若少一心 即不得生」（『往生礼
讃』）と言われたのである。「具此三心」というのは、三つの心を具えな
ければならないということである。「必得往生」の「必」は、かならずと
いうこと、「得」は、うるということである。うるというのは、往生を得
るということである。「若少一心」の「若」は、もしということ、ごとし
とである。一心を欠いてしまつては、浄土へは生まれまいというのであ
る。一心が欠けているというのは、信心が欠けているということである。
信心が欠けるといふのは、本願に誓われた真実の三信（三信心）が欠け

●『教行信証』真仏土・化身土巻研究会報告③●

末法の時代における真理とは

親鸞仏教センター研究員 花 園 一 実

『教行信証』真仏土・化身土巻研究会では、2012年3月1日、東京国際フォーラム(千代田区)において大阪大学名誉教授である大峯顯氏をお迎えし、「末法の時代における真理とは」というテーマで研究会を開催した。研究会では、親鸞が末法という時代をどのように捉えていたのか、そもそも末法とは私たちにとってどのような時代なのか、ということについてお話をいただいた。ここにその内容の一部を紹介したい。

■ 親鸞における末法観の特徴

平安末期から鎌倉時代にかけて、末法という言葉そのものは日本の仏教界に広く浸透していましたが、それはあくまで經典に説かれてある知識としての末法でした。法然を批判した明恵も、親鸞の得度受式の先生である慈円も、『正法眼蔵』を著した道元も、みな戒を正しく守っていた人でしたから、そういう人たちにとっては、どこかに自分は正法を歩んでいるという自信があったのではないのでしょうか。彼らにとって末法は、ある經典に言われている一つの考え方であって、真理ではないと受け取られていた。しかし、親鸞だけがそれを自分の正体として受け取られていた。末法的存在こそが自分の正体だと。この歴史観は歴史学者の対象としてあるヒストリー(history)ではなく、ハイデガーがゲシヒテ(Geschichte)と言っているような内容だと思います。それは私がそのなかに生きて死ぬ世界としての歴史です。年表的なヒストリーの世界では、私たちは生まれもしなければ死にもしない。他人事なのです。親鸞が末法ということを実感しているのは、そういうヒストリーとしてではなく、自分の自覚のなかに歴史が入っている。この歴史的自覚でなければ



大峯顯(おおみね あきら) 大阪大学名誉教授・俳人
1929年生まれ。1953年京都大学文学部宗教学科卒業、1959年同大学大学院文学研究科博士課程修了。文学博士。専攻は宗教哲学。京都大学文学部助手、大阪外国語大学助教授を経て、1971年から1972年まで文部省在外研究員としてハイデルベルク大学留学。帰国後、大阪外国語大学教授、大阪大学教授、龍谷大学教授を経て、2000年浄土真宗教学研究所有長。現在大阪大学名誉教授、浄土真宗教学伝道研究センター顧問。

また、俳人でもあり俳誌「晨」主宰。2002年、句集「宇宙塵」で第42回俳人協会賞受賞。2011年、句集「群生海」で第52回毎日芸術賞、第26回詩歌文学館賞受賞。

著書に『歴史の底から—正像末和讃を読む(上)』、『招喚する真理—正像末和讃を読む(下)』、『君自身に還れ—知と信を巡る対話』(以上、本願寺出版社)、『宗教の授業』、『永遠なるもの—歴史と自然の根底』、『哲学の仕事部屋から 花月のコスモロジー』(以上、法蔵館)、共著に、『妙好人 良寛・一茶(浄土仏教の思想)』(講談社)、『京都哲学撰書』(灯影舎)など多数。

仏法を、本当の自己を知ることはできない。あらゆる仏教者のなかで、そういう視点が最もはっきり出されていたのが親鸞ではないかと思っています。

例えば、ロケットは空中から発射することができません。月という高いところへ行くためには、私たちがいるこの地上からしか飛んで行けないのです。永遠の真理を目指すといっても、その出発点はこの時間のなかを生きている自己でなければならない。親鸞という人は、仏法の

真理をどこで掴むかというとき、それはやはり自分の現実というものの自覚を離れて、仏法の真理など掴めないという、そういう自覚をもっていたのだと思います。

■ 末法に開かれる新しい仏法との関係

末法というのは教えだけがあって行も証もない時代です。しかし、特に証がないということは、やはり教えがないのと同じではないでしょうか。誰も救うことができない仏法など、あってもなくても同じなのでしょう。そうすると末法の時代とは、人間を救うはずの仏法が本来の機能を発揮できなくなった時代なのです。かつてニーチェは「神は死んだ」と言いました。われわれは死んだ神の死体の臭いを嗅いでいると。しかし、そういう時代こそが本当の真理を新しく発見する絶好の時代なのだとニーチェは言うのです。神を殺さないことには本当の世界に出られない。真理が消えてしまったという経験を通さないことには、本当の真理との関係は出てこない。そこは親鸞とよく似ていると思います。末法という仏の救済力が及ばなくなった時代にわれわれは生きている。しかし、そのことをはっきり自覚するということは、そこに新しい仏法との関係が生まれるということです。

浄土真宗は、真理がいったん消えたところから出てきた真理です。それは連続していません。お釈迦さまの教えに両方あって、自力門はだめになったけれど他力門は大丈夫だと、それくらいに受け取られやすいですが、そうではない。いったん仏教は消えてしまった。太陽は沈んでしまった。太陽が沈むというのは釈尊が涅槃に入ったということですが、太陽は沈んでもまだ西側は明るい。残光が残っている。この残光が残っている時代が正法、像法です。末法ではその残光も消えて、真っ暗になってしまった。しかし、その暗闇のなかから月が昇ってきた。新しい光が昇ってきた。従来の仏教は消えてしまったけれど、そのことが新しい仏教の始まりだという、そういう考え方が親鸞聖人にはあったと思います。

■ 末法は人間の現実態

自力聖道門では仏に成れるものが仏に成る。ところが阿弥陀の救済は逆説で、救われないも

のを救うのです。救われるものだけを救うのなら、それは仏ではない。しかし思うに、人間というのはいつの時代においても救われない存在なのではないでしょうか。

末法は仏教が衰退してくる時代であると言われていますが、それはわれわれの生きている世界のありのままの姿が生に露出してきたということです。現実というものが、今までよくわからなかった。しかし、今こそ露出したと。平安時代までの仏教者は夢を見ていた。例えば源信によって臨終の来迎往生が説かれていますが、それはやはり非現実的、つまり人間の現実というものに適していないのだと思います。臨終に救われるという考え方は非力な仏教で、われわれの現実というのはもっと過酷で容赦がない。例えば交通事故に遭えば臨終正念などないでしょう。人間というのは、いつも行き詰まりなのであって、この頃行き詰まってきたということではない。初めから末法的存在だと思うのです。末法的存在であるのに、修行によって助かるのではないかと、自分の現実に対してどこか幻想をもっていた。ところが、そういう幻想は続かない。幻想がだんだんと剥がれてきて、どうしようもなくなった。そこに初めからそうであった人間の姿がはっきり現れてきたのが、末法ということだろうと思います。初めはよかった人間が、だんだんおかしくなったのが末法だというのは、自力聖道門がまだ生き残っているからです。誰もが本当は如来の本願によってしか助からないはずなのです。そういうところから捉え直さないと、末法は他人事になってしまうのではないかと思います。

※大峯顕氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第25号(2012年12月1日号)に掲載予定です。



『教行信証』真仏土・化身土巻研究会(於:「東京国際フォーラム」)

■ 第6回「親鸞仏教センター研究交流サロン」を開催（2012年2月13日）

親鸞仏教センターでは、当センターの活動にかかわっていただいている多くの方々と
のさらなる研究交流及び懇談の場づくりを目指し、2009年より「親鸞仏教センター研究交
流サロン」を開催している。その6回目をさる2月13日、東京国際フォーラム（千代田区）
にて開催した。

今回は、『「関係性」を問い直す—少年犯罪をめぐる視点から—』をテーマに、筑波大学
大学院人文社会科学部教授の土井隆義氏から発題を、大谷大学文学部教授の佐賀枝
夏文氏からコメントをそれぞれいただいた後、参加者との意見交換を行った。

土井氏は、多くの統計資料を示しながら、社会格差の問題と少年犯罪の関わり、生活満
足度が示す現代の若者の特長などについて語られた。さらに、「90年代までの子どもたちは
不満を抱えていた。不満というのは希望の裏返しであり、希望をもっているのに実現さ
れないことで起こる感情である。しかし、今は希望が消えてしまっているため、不満では
なく不安を若者たちは抱えている。希望をもちたいのにもてないのが『希望格差』だが、
昨今は、そもそも希望をもちたいというモチベーションすらもてないほどにその格差が
進んできているのではないかと提起されるなど、現代人を取り巻く「関係性」について
多角的に語られた。

佐賀枝氏からは、悩みをかかえる子どもたちの実際の声が紹介され、「これから関係性を考えていくうえで、あらためて
『正信偈』の中の「如衆水入海一味」、いろいろな水が流れあって一つになっていくということを一つの指針として考えて
いくことが大事なのではないか」などのご提言をいただいた後、約20名の参加者による意見交換がなされた。

※内容は、『現代と親鸞』第25号（2012年12月1日号・1冊1,200円）に掲載の予定です。



■ 鈴木大拙『英訳 教行信証』改訂版刊行！

当センターでは、1973年に刊行された鈴木大拙師英訳『教行信証』の改訂版刊行事業を2005
年から進めてまいりました。これまでに、東京大学名誉教授で東方研究会理事長の前田専學
氏（監修者）をはじめ、数多くの方々から丁寧なご尽力をいただき、このたび、Oxford
University Press から発行される運びとなりました。

本書の発行によって、この『英訳 教行信証』を通して親鸞聖人の教えが世界中に広がって
いくことを願ってやみません。

[Contents]

Illustrations
Editorial Foreword
Chronology
Introduction to the D. T. Suzuki Translation of Shinran's *Kyōgyōshinshō*
Translator's Newly-Edited Introduction and Appended Short Works
The Forty-Eight Prayers
Bodhi-tree
The Prayers Summarized (*The Jūsei-ge*)
Vasubandhu's Gāthā on a Birth [in the Pure Land] (*The Ganshō-ge*)
The Kyōgyōshinshō
Preface
[I] The True Teaching

[II] The True Living

[III] The True Faith

Preface

Part One

Part Two

[IV] The True Realizing

Afterword

Notes

Glossary

Selected Bibliography on Shin Buddhism in Western Languages

Index



—— お問い合わせは親鸞仏教センターまで ——

■ 出版物のご紹介

◇『一念多念文意講讀』法蔵館



『一念多念文意』を読み解くことで、親鸞
聖人の求道の根幹をなすテーマにせまりつ
つ、「信心為本」の内容を明らかにしようと
する当センターの本多所長の一冊です。徹
底的に本願に導いていきます。

お問い合わせは法蔵館まで

TEL 075-343-5656

■ あとがき

▼昨年は、本山御遠忌の年のため開催がかなわなかった「親鸞仏教セ
ンターのつとめ」を、4月7日、当センター並びに学士会館を会場に開
催した（詳細次号）。今回で9回目である。ご出講いただいた迎見席先生
の講演で、自らが問われていることを指摘され、心の底から発せられる
言葉に震える思いがした。▼つとめ当日、ご来賓でお呼びしたにもか
かわらずご挨拶ができなかった方々に、この場をお借りして御礼申し上げ
たい。ありがとうございました。（金石）▼「現代と親鸞の研究会」にお
招きした平川秀幸先生から「熟議」の大切さを学んだ。蓮如上人の「物
をいえいえ」との言葉が思い起こされた。と同時に「聞く」ことは、自
身の置かれている場所が元来一人で成り立っているのではなく、元来思
いどおりになる場所ではないことが知らされ、他者を「待つ力」になる
といただいた。「おもしろい！」とお互いにうなずきながら身を置ける場
所作りが各分野で求められている。そのことに苦勞を惜しまず努力しな
ければならないと強く感じた。（大江）▼鈴木大拙先生の英訳『教行信
証』再版事業で、インデックスの作業に私も微力ながら、かかわらせて
いただいている。作業を進めていると、この再版の仕事に携わった方々
のご苦勞を垣間見ることができる。この『英訳 教行信証』は50年間残る
仕事だと言われている。50年後、次の御遠忌に残る本。そう考えると自
然と背筋が伸びて、ひとつひとつの作業に慎重になる。できあがった本
を手にすることを楽しみにしながら作業を進めている。（三浦）